

久留米の自然



2007年7月1日 第97号 タゴガエルの成体と卵塊

撮影場所 高良山北まわり遊歩道 撮影時期 2007年4月1日 撮影者 行徳 直久

タゴガエル

丸山 由紀子

山地や林床に住む茶色いカエル(アカガエル科)で、田子勝弥さんという両生類学者に因んで名付けられたそうです。上の写真は、4月に高良大社近くで採取された成体と卵塊です。本会幹事の行徳さんと橋田会長が「キャウキャウ」とイヌを思わせる鳴き声を聞いて付近を捜したところ、成体と卵塊が見つかったそうです。

成体は6cm程の大きさで、後肢が長く全体的にスマートな印象です。鼻先から目の後ろにかけての黒い部分が目立っていて、精悍な感じがします。卵は4月中旬には孵化し、約60匹のオタマジャクシが生まれました。オタマジャクシというと「黒」というイメージがありますが、タゴガエルのオタマジャクシは全身が白っぽく、顕微鏡で観察すると、グルグル巻いた消化管や心臓の動きなどを見ることができます。「白い」オタマジャクシも、やがて後肢が出て前肢が出て(歌の順番とは逆)変態が近くなると、成体と同じような褐色がかかった色になってきます。4月28日には「元気で大きくなれよ・・・」

と願いつつ、成体とオタマジャクシを元の場所に戻してきました。人目につくことが少ないため、タゴガエルの生態はまだ分かっていないことも多いそうです。世界的なツボカビ病の流行や生息地の開発など、両生類にとっては住みにくい世の中になってきていると思いますが、今年生まれたタゴガエル達が高良山の自然の中でたくましく生きていることを願っています。



タゴガエルのオタマジャクシ

撮影者 丸山由紀子

久留米市の蝶 36

ダイミョウセセリ

国分 謙一

日本の蝶には江戸時代末期にヨーロッパ人にて、日本産で学名(世界共通名)が記載されたので当時の日本語を使用した蝶がいて、侍(サムライ) 芸者(ゲイシャ)などが使用されていますが、ダイミョウセセリ自体は日本産(北海道の函館産?)をもとに、江戸時代に記載されましたがダイミョウとは使用されておりません。少し遅れて明治になってからダイミョウセセリ属(横浜産?)として他の蝶の仲間と違っていると区別されたもので、日本の大名の名称を用いられました。名付けた人は日本に来たことがなく、どうしてダイミョウとしたのか判りませんが、標本を寄贈した人が教えたのか、または、日本の文化に興味を持っていたからだと思います。

日本では北海道の南端から九州まで棲息していますが、北海道では少ない蝶です。国外では日本周辺の台湾、中国、朝鮮などに棲み世界的には棲息範囲が狭い蝶です。

関が原の戦い

人間の言葉と同じく国内でも方言があるように、蝶にも地方により変異があり、種の下ランクの亜種として区別されていますが、ダイミョウセセリは東日本と西日本で斑紋に著しい違いがあるにもかかわらず、亜種としてでなく型として区別されています。東日本に生息しているのを関東型、西日本を関西型と呼んでいます。東日本産には後翅に白斑列がなく西日本産にはあり、この境界は福井県の若狭湾から伊勢湾を結ぶ線が境といわれていますので、関が原周辺では白斑列の出現が入り乱れているようです。

なぜ、このように同じ種類なのに違いがあるのかは明確には分かっておりませんが、他の生物の生息状況から推定されるのは、日本に生息して来た年代が違っているのではないかと、日本に関東型が生息した後に、新しく関西型が分布し関が原周辺まで分布を広げているのではと私は思っております。

種と亜種と型

関東型と関西型では斑紋に違いがあるのになぜ種でなく型なのかは、生物学でいう種と亜種

と型の違いがあるからです。

生物学の教えと違っているかもしれませんが、私は種とは永続的に遺伝子の交流がないものを、亜種とは隔離されていて姿、形に違いがあるが直ちに隔離を解くと容易に遺伝子の交流を行うもので、今後長い年月の後には遺伝子の交流ができなくなり、種になる手前の状態、型とは姿、形は違っても分布が重なっていて遺伝的な隔離がないものであり、今後も長い年月をかけても種にならないものと私は思っております。

ダイミョウセセリは何万、何十万年前かは知りませんが、亜種の状態であったものが南から分布を広げてきた関西型が日本でぶつかり、遺伝子の交流が始まったのではないかと思っております。

種と亜種と型の区分は人為的なものなので研究者により違いがあり、生物(植物を含んだ)を種とする人、同種とする人、亜種とする人がいます、これから研究が進めば現在の図鑑の記述が変わっていくので、皆さんは図鑑の記述を鵜呑みにせず、自然に疑問を持ち、自分の目で確かめた自然観察をしてください。

久留米市での観察

久留米市では高良山などの山間部では普通に見られますが、平坦部では殆ど見ることが出来ません、5月中旬から9月まで森林の多い場所で日陰になっているような所を探すと見つけることができます。飛び方は非常に速く黒い物体が飛んで来たと思った瞬間にピタッと葉の上に翅を下記の絵のように水平に広げ止まり、前後翅の白斑列が目立つのですぐに分かります。



関西型

関東型

善導寺の大樟(2本)福岡県指定天然記念物

高山 美子

久留米市善導寺町の浄土宗鎮西本山善導寺を開山された鎮西聖光上人の植樹とされている、樹齢約800年。境内に大きく枝を広げ夏は涼しい風を呼び、秋や春には霧が静かに包み神秘的な情景を見せてくれる。

台風にもめげず、横いっぱい枝葉を繁らせ私達を見守っているようで、心も体もゆったりといやされる。西側の2号木は根元がうろになっている。



善導寺の大樟

撮影日 2006年2月7日

撮影場所 久留米市善導寺町

撮影者 高山 美子

久留米市文化財専門委員(天然記念物)

| | 根回 | 胸高周囲 | 樹高 |
|---------------|-------|-------|-----|
| 1号木 (東側の樟) | 27.4m | 9.5m | 39m |
| 2号木 (西側の樟) | 34.6m | 12.3m | 41m |

金丸川20年の変遷

野口 勝司

昭和60年、筑後大堰建設に伴い、金丸川河口流域一帯の開拓堤防の建設及び拡張工事、その後平成3年から平成9年の間に河口より2 - 3km 上流付近の金丸川改修工事が継続して実施され、平成17年に湯の尻川合流付近の堆積土の浚渫工事、続いて翌年平成18年12月男橋付近から津福上橋間の浚渫工事1月上旬に終了。なお平成17年頃からJR 鹿児島線と金丸川の交叉流域の橋梁の改修及び川岸の護岸の補強がなされているが川の流域は粗終了した。

相続く河川改修工事の結果、川幅は拡張し、流路の曲折は改良されたが湯の尻川との合流点

付近より池の尻橋間約200m(潮の干満の影響を受け水質汚濁の状態になりやすい)古賀坂水門より湯の尻川合流点付近まで約1.2km 勾配1/500。金丸川の特徴である。

浚渫作業で大量の堆積土が除去されるが植生も消失し(たとえばマコモ、オオバタクサ、ジュズダマなど)動物では水生昆虫類、魚介類などの産卵、棲息の領域が消失し、石垣の構造より推測すると今後生態系の回復までには相当の時間を要するので、粘り強く取り組んで検索していく必要を感じている。

略図

生き物に魅せられて その36

コオニヤンマの巻 松永 紀代子

晴天続きの2005年6月に、筑紫野市の山口川の観察会に同行した。コヤマトンボが川面をパトロールし、タカハヤが群れて泳いでいる。早瀬の石を持ち上げると、タニガワカゲロウの仲間がもぞもぞと動く。

ふと、顔を上げたとき、水際近くに広がった葉の上の黒っぽいものに気が付いた。コオニヤンマのヤゴで、まさに羽化が始まったところだった。

まだ息子たちが小さかった頃、このヤゴを捕まえ、羽化させようとして失敗したことがあった。その原因が今になってわかった。

コオニヤンマは、ギンヤンマのヤゴのようにほぼ垂直に生えた茎に平行に止まるのではなく、何かに乗っからないと羽化できなかつたのだ。あの重そうな平べったい体だもの。立てた割り箸をのぼらせ、ギンヤンマ式の羽化を誘うなどもってのほかだったのだ。

郷土の主な植物

猪上 信義

1. イチイガシ

ブナ科の常緑高木。日本の関東以西の暖帯下部域に自生し、中国にも分布する。樹皮は暗褐色で古くなると、うろこ状にはげる。幹は若いときにはまっすぐに伸び、後に斜上し、樹高は30m、胸高直径1mに達する。寿命が長く、神社林などにはこれを超える大木が見られ、保存木となっていることがある。葉は互生、倒披針形で、長さ6~12cmで、上半分に粗い鋸歯があり、葉裏には初め褐色の毛が密生するが後に無毛となる。花は4~5月で、実は同年の晩秋に熟す。堅果は楕円形で径10~13mm、長さ20mmくらいで、先端に褐色の毛が残る。

この実(ドングリ)はアクが少なく、火を通すだけで食べられるので、縄文時代人の主要食料であった。これはこの時代の遺跡のドングリピットと呼ばれる貯蔵庫跡から大量に出土することからも分かる。その名残として、近年までこの実の粉を、イチゴンニャクという名で食用に供する地方もあった。

材は重く硬いが、加工がしやすく、各種の器具材、建築材とされ、その昔は船の艀(0)や荷車に用い、近年まで薪炭材などにも利用した。

潜在自然植生(人間の影響を一切停止したときに、その立地に生ずるとされる植生)としては、山地の下部(丘陵地)あるいは沖積地の適潤地すなわち地形的には砂礫台地(低位段丘)には、高木にイチイガシまたはコジイが優占し、下層にカンザブrouノキやルリミノキを伴う植生が存在したとされる。この場所は洪水などの影響を受け難いので、昔から住宅地や畑として利用されている。さらに今日では水田、竹林、果樹園、樹園地、工場、店舗などとなっているので、現存地は社寺林などにわずか見られるにすぎない。県外では大分県の宇佐八幡宮の社寺林が有名である。

久留米市内では耳納山麓から筑後川の沖積平野に広く存在したと思われるが、前述のように人間の活動域に利用されて、現存地はきわめて少ない。かろうじて善導寺周辺のイチイガシやケヤキの樹林にその面影が見られるが、下層は除伐や車の進入などにより完全に破壊され、路傍雑草や竹が繁茂している。

ひととき 動物笑い話 その42

ヤマアラシ(山荒)

こげ茶から黒の毛で、体毛の間に太い円筒形の針を持ち、いらだったり襲われたりすると、針を立てて後ろ向きに立ち向かう。針は簡単に抜け、敵に刺さり、激痛を引き起こす。2匹の雄が話していた。「この前もハイエナに襲われたが針のお陰で難を逃れたよ」「本当に役立つね」「でもカミさんには気を使っているよ。いらだつとすぐ針を立てるから」「それは言えるね。山の神の嵐になっては手が付けられなくなるからね」「それで、俺達雄は昔から子育てを手助けするようになっているのかも」「ところで、人間は俺達の事を作物荒らしと言って敵対するけど、住家を奪って開墾したのは彼等だけ。頭に来るよ」「怒るなよ。あぶない、針が刺さる！」

*ヤマアラシ科の哺乳類に属し、体長は大きな種で80cmに及び、大型肉食獣からは針で効果的に身を守る。(Y.Y)

第26回「くるめ緑の祭典グリーンキャンペーン」にて河内俊英副会長緑の貢献者受賞

2007年5月4日『みどりの日』筑後川発見館くるめウスにて、平成19年度 緑の宣言者・緑の貢献者表彰式が行われました。

久留米の自然を守る会からは個人の部で、副会長の河内俊英氏が受賞されました。久留米の自然を守る会の4月のイベントとして2001年から、7年間高良山遊歩道樹木の名札付けを行ってきました。河内氏はそのイベントの発案者であり、積極的に樹木の名札付けに尽力されました。また、高良山の緑の破壊防止や絶滅危惧種の保全・保護に日夜、健闘されています。今では、環境問題では第一人者として、講演会などで講師として活躍されています。皆さん方で環境問題の学習会をしたいという方がありましたら、是非お尋ねください。これからは温暖化と環境問題は避けておれない課題です。未来の地球に緑を残したいと願っているからです。(H.S)



江藤市長から表彰を受ける河内副会長(左)
撮影者 行徳直久

くるめ緑の祭典グリーンキャンペーンは市の緑化運動に貢献した人を表彰するもので、今年で26回目になります。

筑後川に南米産水草ブラジルチドメグサ出現 生態系への影響懸念

橋田 沙弓

6月6日付の西日本新聞に国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所が5日、国内の生態系に悪影響を与える恐れがある「特定外来生物」に指定されている水草、ブラジルチドメグサを大分県日田市の筑後川上流で確認したと発表した。筑後川では初めて。地元住民から連絡を受けて調べたところ、支流の二串川で約2kmの大群落、本流で5つの小群落を発見した。発見者によると、5月中旬ごろから繁殖が目立つようになったという。

ブラジルチドメグサは南米原産、川岸や湿地などに生える。3ヵ月程度で長さ2~3mに生長し、水面全体を覆うようになる。その結果、水中への光を遮って生態系を変えたり、川の流れをせき止めたりするという。

国内では1998年ごろから確認され、2001年に大繁殖した熊本県の菊池川流域では、毎年除去した根絶出来ていない。

久留米では、筑後川河川事務所近くの新宝満川河口でも6月中旬ごろ、100㎡初めて繁茂しているのが発見され、河川敷に引き上げられると、その場所で花芽をつけている。要注意の植物である。



ブラジルチドメグサ
撮影場所 新宝満川河口
撮影者 橋田沙弓

高良川流域のキノコ(その3)

角 正博

比較的、雨が多かった昨春に比べて、今春は、昨春の降雨量の6割程度しか雨が降っていないようです。そのせいか、今年は後谷(うしろんたに)などの水量も少なく、キノコの出も悪いようです。そのような中で、今年もオオゴムタケが発生したのにちなんで、今回は子囊菌類の一部を取り上げることにしました。

一般に、菌類の中で大型の子実体を作るものをキノコと呼んでいますが、キノコは担子器と呼ぶ器官に外生して生じる担子胞子でふえる担子菌(亜門)と、子囊と呼ぶ囊状の器官に内生して生じる子囊胞子でふえる子囊菌(亜門)に大きく分けられます。子囊菌亜門は、さらに子囊果(子囊を形成する子実体)として子囊盤(表面に椀状~皿状の広く露出する子実層が形成されたもの)を形成する盤菌綱と、子囊果として硬い子囊殻を形成する核菌綱に分かれます。盤菌綱にはビョウタケ等を含むビョウタケ目やオオゴムタケやノボリリュウタケ類を含むチャワンタケ目等が含まれます。一方、核菌綱にはサナギタケを含む麦角菌目やマメザヤタケ、クロコブタケ、ヒメアカコブタケを含むクロサイワイタケ目等があります。まずは盤菌綱のオオゴムタケから紹介します。

5. オオゴムタケ(大ゴム茸) *Galiella celebica*
クロチャワンタケ科オオゴムタケ属に属します。高良川流域では近年、5月末から6月初めに、支流の一つで発生しています。土中に半ば埋もれ、かなり腐朽が進んだ広葉樹の落枝から生じます。子実体は黒褐色で、クロチャワンタケ類の中では、著しく肉厚(新鮮な時)です。中にゼラチン層があるので、ゴムやコンニャクのような弾力があります。子実層は浅い皿状で、高良川流域のものは直径が1.5~5cm程度です。子囊層の縁および外側は毛で覆われています。胞子が熟すと浅い皿状の子実層から、まるでほこりが舞うようにいっせいに無数の胞子が空中に飛散します。

6. ノボリリュウタケ類

ノボリリュウタケ科ノボリリュウタケ属に属します。高良川流域では4種を確認しています。ナガエノチャワンタケ *Helvella macropus* は、子囊盤が淡褐色、平皿形~浅い椀形、下(裏)面と柄に毛があり、柄は細長く円筒状です。クロノボリリュウタケ *H. lacunose* は、灰黒色~黒褐色の鞍形の子囊盤を生じ、下(裏)面は無毛、柄は太く、淡灰褐色で深い縦溝があります。クロアシボソノボリリュウタケ *H. atra* は、灰黒色~黒褐色の鞍形の子囊盤を生じ、下(裏)面は無毛平滑、柄は細長い円筒状です。以上の3種は寺尾谷に産しましたが、残念なことに今春、産地が土地造成によって破壊されてしまいました。アシボソノボリリュウタケ *H. elastica* は、黄土色~淡黄褐色の鞍形の子囊盤を生じ、下(裏)面は無毛平滑、柄は細長い円筒状です。後谷や筒谷の土崖で見られます。



オオゴムタケ(撮影者 橋田沙弓)



クロノボリリュウタケ(撮影者 橋田沙弓)

高良山自然史観察ビジターセンター兼久留米っ子百年標本館の設置について考える

角 正博

過日、市の農林課の職員と高良山について話す機会があった。その話とは(1)緑化センター～兜山キャンプ場～一ノ瀬親水公園をつないでの活用策、(2)高良内幼稚園駐車場東側の、山肌が露わなまま放置された造成地の修復緑化の2点であった。(1)については、兜山キャンプ場の西方から、温石の東側の尾根道を下りて一ノ瀬へ向う荒れ果てた人道の整備を提案した。やや健脚向きのルートであるが、途中で温石温泉に下りる脇道もあり、一ノ瀬親水公園まで辿ることができる。しかし、帰りの交通手段がないのが難点だった。一方(2)については、放置された造成地は、久留米の3億年から400万年前の自然史を知るための絶好の観察ポイントでもあったので、単なる放置された造成地の修復緑化に終わらずに、高良山自然史観察ビジターセンター兼標本館の設置も含めた修復緑化を提案した。その主なポイントは以下のとおりである。

放置された造成地は、高良山南麓の断層線上にある。この断層は、現在の久留米市を地下で支え、地下水の通り道となっている久留米層のもとになった400万年前の古久留米湖の形成に関与したものと考えられる。また御井の三泉の断層湧水にも関与していると考えられ、重要な断層をそのまま観察できる貴重な場所として残して活用した方がよい。

放置された造成地は、眼下に水車谷を扇頂とする高良川扇状地が市内で最もよく一望できる場所である。久留米市の水環境を示す扇状地地形および地下の伏流水の動きが鳥瞰できる貴重な場所である。またかつての水車谷の上に位置している。

高良山麓には、海岸植物が辛うじて残存し、かつて海が迫っていたことを示している。歴史ある高良山は、地質・断層や生物・生態系から渡来系の神など民俗・歴史にまたがる多角的な視点を盛り込める自然史観察の拠点に向いている。

高良山の自然観察会を開催するにあたって、人家が多い高良山の西の御井町側や北の山川町側に、新たに観察会の拠点や駐車場スペースを確保することは困難であるが、放置された造成地は竹の子コースと後谷コースのいずれにも極めて近く、また駐車場スペースを広くとって整備することも可能で、自然観察会の拠点となりえる。特に御井町側人道コースや山川町側の王子谷コースは、杉林が多く自然林が少ないのに対して、竹の子コースや後谷コースは比較的若いコジイ林であるが、自然林が多く自然観察会の拠点に向いている。

高良山は、かつて珍しい植物の宝庫として有名であり、自然観察会の拠点として、ビジターセンターがあっても不思議ではないはずなのに、いまだそうした施設がない。農林課も写真パネルの展示を企画しているが、そうした高良山の自然を四季折々紹介する拠点施設と連動した展開がそろそろ必要である。

自然観察会の拠点として、時々写真パネル展などを企画して紹介するためには、ビジターセンター内に高良山の植物標本や写真パネルを保存する標本庫を設置すべきである。高良山の自然をまるごと残すことは大切であるが、特に、近年、高良山で数を減らし、見られなくなっている植物が出てきているのに、まとまった標本を伴う記録が作られていない。早急に高良山のまとまった植物標本作製し、百年後の久留米の子どもたちに残すことが重要な時期に来ている。なお、標本庫を核としたビジターセンターとすることで展示物の固定化を避け、四季によってさまざまな展示企画を行い、リピーターを確保できるようにする。

こうした自然観察や展示などの運営については、専門スタッフの数が限られるため、ボランティア団体の参加が不可欠である。そうしたボランティアスタッフの育成やボランティア団体の会議のための観察・集会スペース(集会室)も併置する必要がある。

例 会 報 告

第342回例会

筑後川春の野草を愉しむ会

雨天のため中止になりました。

第343回例会

高良山の樹木名札付け会に参加して

葉山 アツコ

河内先生からご案内を頂いたときからこの日を楽しみにしていた。以前から、高良山の樹木について詳しい方に教えて頂きたいと思っていたので、そのような機会があるとなれば是が非でも参加したいとカレンダーに印をつけておいた。この会に参加したもう一つの理由は、久留米で環境や自然について活動されている方たちと知り合いになりたかったからである。久留米で生活し始めて1年半以上が経ち、そろそろ生活者として根をはりたい、そのためにも地元の方たちと知り合いになりたいと思っていた。そのようなわけで、4月22日の高良山の樹木の名札付け会はわたしの希望を二つも同時にかなえてくれたわけだ。

雨のなかの作業は予想以上の楽しいものだった。雨でなかったら、あれほど沢山の美しいシーボルトミミズに出会えなかっただろう。あちこちで沢ガニが飛び出している光景に大人だってワクワクしてしまう。

森林の専門家の猪上先生のととてもわかりやすい説明を森の中で聞くことがきたのはこの上なく幸せなことだ。また、参加なさった方たちがそれぞれ分野の専門家で、関連する話を聞けるこの会はとても贅沢な授業であった(生徒のわたしは、なかなか樹木名が覚えられない劣等生ですが)、樹木の名前や特徴が少しわかってくると、彼らに愛着が湧いて来て、「そうか、キミらはこんなところが好きなのか」という気持ちになってくる。

高良山の森林の特徴がつかめて、たいへん充実した時間を過ごすことができた。「高良山の樹木の名札付けの会」が四季を通じてこれからも何回も開催されるように願っている。

高良山・吉見岳経由高良大社へ樹木調査

黒岩展子さんの指導で行徳、杉田の3人で事前調査が4月17日行われました。22日(日)は参加者7名、猪上信義さんの指導で雨の中実施されました。そのときの植物リストを紹介します。

ムラサキシキブ、イヌビワ、ナナミノキ、イワガネ、ヤブムラサキ、アオキ(雌株、雄株)、ニワトコ、ハクサンボク、ボロボロノキ、ヒサカキ、タブノキ、ヤブツバキ、ヤマモガシ、カクレミノ、イズセンリョウ、ネズミモチ、ツブラジイ(コジイ)、ニワトコ、アリドオシ、タラノキ、ナワシログミ、ヤブニッケイ、ヤマビワ、ピナンカズラ(サネカズラ)、ハマクサギ、ミズズバイ、ムクノキ、サカキ、イチイガシの29種(S.H)



雨の中での名札付け(撮影者 葉山 アツコ)

第344回 バードウィーク探鳥会

米田 豊

日本野鳥の会筑後支部、市役所、県朝倉農林事務所との共催で、高良山・四季の森で行われました。天候に恵まれ、42名が新緑の中での山歩きを楽しみました。望遠鏡ではホオジロやカワラヒワなどしかお見せで出来ませんでした。それでも参加者はインパクトを受けたようです。初夏の自然の恵み、イキチゴ3種の食べ比べも出来ました。探鳥会終了後、穂先竹の子採りに参加し、沢山採りました。

尚、観察された野鳥はコサギ、トビ、キジバト、コゲラ、アオゲラ、ツバメ、キセキレイ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、オオルリ、キビタキ、エナガ、ヤマガラ、ジジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、イカル、スズメ、ムクドリ、カササギ、ハシボソガラス、ハシブトガラスの計24種で、番外でソウシチョウ、コジュケイ。

「高良山バードウィーク探鳥会」に参加して 久保田 和秀

探鳥会の高良山南面コースは初めての経験で、北面コースと比べて良く整備されたコースの印象を持ちました。

探鳥会ということで、小鳥の囀りに意識的に耳をそばだて、これまでせいぜい5, 6種類しか区別が出来なかった小鳥の囀りを、野鳥の会の方のガイドで倍以上の鳴き声を確認出来、心に刻みました。バードウォッチングといいながらも簡単にその姿を見つけることの難しさと共に、キビタキなどの清楚な囀りなど、表現は変ですが「囀りウォッチング」の楽しさを同時に体験できました。

また、理由もなく嫌っていたカラス、殊にハシブトの鳴き声のユーモラスさを通じて親しみを感じ、先入観の拙さを教えられました。

帰宅して早速、ネットの囀りサイトで小鳥たちの鳴き声を聞き直し、これからの山行きでの楽しみがもう一つ増えたことをありがたく思っています。関係者の皆さんに感謝いたします。

山内 ゆみ

ふだんみれない鳥や、知っている鳥でも、もっとくわしく知れたので、いい体験でした。でも、あまり、鳥の姿が見えなかったのでこんどきた時は、姿が見れるといいです。

伊藤 和美

普段聞いている鳥の声も、名前を見るまでは、なかなか至らなかったけれど、楽しくイキイキ時間を過ごさせていただきました。

鈴木 みゆう

いろんな生物がいっぱいいておもしろかったです。パパはシジュウカラみたいに、はたらいてほしいです。

「高良山四季の森 ゴミ清掃と記念植樹ボランティア活動」に参加して

行徳 直久

この活動は、福岡県造園業協会主催で、心地よい景観作りへの貢献 子供達による記念植樹による緑化アピール 動植物の生態系と自然環境を現地で学習し大切な緑の贈り物を後世に引き継ぎたいというスローガンのもとに、4月14日高良山「森林ツツジ公園」で実施されました。

当日は、前日と打って変わっての好天で、参加者は県内各地から同協会関係の人たちを中心に、80人近くが作業着姿で集合しました。

久留米の自然を守る会としても、樹木：猪上 野鳥：米田 キノコ：角 昆虫：行徳の四人がガイドボランティアとして参加しました。

そして、まず三班にわかれてゴミを拾いながらの自然観察会が行われました。

また、当会から申し入れもあって公園内の桜に多発していた「天狗巣病」に罹病している枝の切除が、別働隊の活動で実施されました。

天狗の巣がなくなった桜の木は、来年以降一段と美しい花を見せてくれるでしょう。

ごみ拾いが終わったメンバーも加わって、切り取った枝の整理が終わり、漱石歌碑の広場へ移り子供達によるイロハモミジの記念植樹が行われました。

その後、「高良山周辺の樹木」「久留米市の昆虫」「身近な野鳥のいろいろ」「高良山のキノコ」について、我々ガイドボランティアから合わせて一時間ほどお話をしました。

全員での活動は、午前中で終了し、午後には市内の景勝地めぐりや観光など思い思い愉しんでもらうという一日でした。



天狗巣病に罹病している枝の切除作業

撮影者 橋田 沙弓

《行事案内》

第347回例会:

水辺の自然観察会

毎年、高良川の水辺の自然観察会を行っています。今年は、筑後川発見館くるめウス前、さくら橋下の水生生物(水生昆虫、魚類、その他) 河川敷の植物や昆虫などの観察を行います。ご自由に参加ください。

〔日 時〕: 7月22日(日) 9:30 受付

〔集合・解散〕: 10:00~12:00

〔場 所〕: くるめウス

〔参加費〕: 無料

〔持ち物〕: 観察・採取用具、筆記用具、タオル、長靴、ゴムぞうりまたは古靴、濡れた場合の着替え、帽子、水筒など。

第348回例会:

筑後川観月会

例年どおり抹茶をいただきながら、月や星の観察をします。ご自由に参加ください。月面観察の指導は吉田哲磨氏です。

〔日 時〕: 9月22日(土) 18:00 受付

〔集合・解散〕: 19:00~21:00

〔場 所〕: くるめウス

〔参加費〕: 300円

第349回例会:

ネイチャーゲームと自然観察会

高良内から四季の森を通り森林公園まで行きます。昼食後、自然観察とネイチャーゲームをしながら下山します。秋の自然を、満喫しましょう。ご自由にご参加ください。

〔日 時〕: 10月14日(日) 8:30 受付

〔集合・解散〕: 9:00~14:30

〔集合・解散場所〕: 高良内幼稚園横駐車場

〔現地〕: 四季の森・森林公園

〔参加費〕: 1000円

《事務局だより》

毎月15日、久留米市市民活動サポートセンターにおいて、市民活動団体が集まって「合コン」が開催されているが、今月の同会では30年後の夢見る社会としてその絵を描く企画があった。個人的には小学生レベルの絵しか描けないのだが、色とりどりのマジックに思わずはまってしまった。発表段階になって自分で描いた絵を見ておどろいた。子どもの頃は、何重にも立体交差した高速道路、カッコいい車、高層ビル、なんてのを描いたような気がするが、今の絵は明らかに昔々の農村、それも自分で電気の無い社会を描いたと発言していた。こんなにも頭の中が変化したのは、現代社会のせいなのかそれとも年のせいなのか考えさせられる。(古賀信夫)

「久留米の自然を守る会」ホームページ

<http://kurumenoshizen.net>

ホームページを新しく作り直しています。閲覧者が書き込める箇所を増やしていますので、どんどんアクセスしてください。

1. 会員消息 入会 葉山アツコ、堤 静雄(久留米市) 退会 中野啓子、高山純子、安松雅彬、金子吉湖、三牧亮介

2. 会費納入について

会費は、会の活動を支える源です。まだ、会費を納入していない人は振替用紙(口座番号01750-1-40114)に年会費2000円をご確認のうえ納入をお願いします。

3. 原稿募集

次号98号は平成19年10月1日発行予定です。原稿の〆切は9月1日です。皆さんの原稿をお待ちします。

4. 幹事会のご案内

幹事会(定例)は原則として毎月第1水曜日の19:00~21:00まで、西町教育集会所で行います。皆さんも気軽にご参加下さい。(9月5日、10月3日)

久留米の自然

平成19年7月1日 第97号

発行 久留米の自然を守る会

発行者 橋田沙弓

事務局 〒839-0827

久留米市山本町豊田2320-6

TEL 46-8622 FAX 46-8623 (古賀)

印刷 (有) プリンティング コガ

TEL 0944-88-0027 FAX 0944-88-0029